

Title	雜報
Author(s)	
Citation	地球 (1930), 14(3): 236-241
Issue Date	1930-09-01
URL	http://hdl.handle.net/2433/183804
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

釋、南島方言資料、壹岐島方言集などいふ三冊も既に出版されてゐることを報告しておく。(藤田)

Oribiography on Magnesite Deposits of the World

新帶國太郎著 菊版百〇

七頁

各國別に文獻目錄を記したもので著者と書名を並べてあるマグネサイトに關してもこれだけ多數あると云ふことが明にされて、著者の努力を多とせねばならぬ、非賣品らしいが滿鐵地質調査所の著者にたのめば、實費で頒與してくれるものと信ずる。

雜報

○フィリッピンの産業

フィリッピンは今尙必要品の全部を輸入し、其輸出の九割までは原料品である、これは西班牙治下三百年間其工業の發達が停滯し、人民が天恵になれて慾望を起さなかつた結果である、しかし米國の政治をうけて以來、舊式な農業もしくは舊式の工業は、次第に淘汰されて工業機械は隨所に据ゑつけられるやうになつた、今その大體を見ると、第一砂糖業、數年以來半農狀態を脱し動物の力で製糖してゐた舊式から現代式にかはつた、一九一〇年に近代式製糖工場が出来今日ではその數四十、一日の總能力は四七、六三〇米噸に達した、比島到る所で甘蔗をつくるが工場

はネグロス島、パレバンカ、バタンガス、ヌエバエシバ、タラク、パンガシナン地方に局限される。

二、烟草製造 この事業は一七八一—一八八二年に至る長い間政府の專賣であつた、其收入が政府の歳入の五割に上つた、現在でも其製造工場へ送くられる良烟はカマヤン河谷地方から出る、この名は朱印船渡航地名のうちに既に我國に知られてゐた名である。今日も優良な葉巻がでる、工場の數全國で九二、紙巻工場は二九、使用職工は五萬人、カマヤン以外の地でも烟草の産は多い。

三、椰子工業 本業は比島人生活の大部分をしめ、輸出第一位をしめす、椰子工業の重なるものは、コブラ、椰子油、油片椰子肉、植物性ラード、菓子及菓子原料の製造である、大部分は家内工業であり、コブラ年産額は約四一〇、〇〇〇米噸である、大戰以後搾油工業が發生し其壓搾量はコブラ全産額の五割に達する、その製油額は年に一五〇、〇〇〇乃至二〇〇、〇〇〇米噸に達し其副産物にコブラケーキがある。

四、アバカ工業 マニラ麻の壓搾は四十ヶ所麻挽は三、四〇〇ヶ所で行はれる、これも大部分は家内工業である、製網業はマニラの三大工場に盛であつて年額二〇、〇〇〇噸に達する。猶又少數の都市ではこの纖維で織物をつくる、比島婦人の被服に供して市場に出でない。

五、刺繡 大戰のために促進されたものの一である、今日はマニラ市内外で五萬人からの婦人が従事してゐる、米國人の資本で行はれてゐる。

六、織物業 各都邑に古來からの織物業があつて、カピスの麻織は有名である。

七、帽子業 家内工業として大きい、麻、竹、ブントル及其他の纖維からつくる、男女工の數凡二萬人、百五十萬個を輸出する。

八、木材 森林地は廣い、ルソン、ミンダナオ、ミンドロサマル、レエテ、ネグロス、パラワンの森林は廣大で硬材の産出が多い。

九、其他の工業には革靴、罐詰、鑛業等がある、水力資源として水力利用の見込の多い發電所が多いことを考ふときは將來は益々發展すると考へられる。

○世界に於ける米の收穫と日本の米作 最近二十

箇年に於て他の重要食糧品の收穫に比し米の増加は遅々たるものであつた。大戰前年平均收穫一億三千八百萬噸であつたが、一九二八年より一九二九年に亘る年度には一億五千萬噸に増加せるに過ぎず、その米收穫表左の如し。

	米 噸	増加率
一九一〇年より一九一四年迄の年平均	一、三六、二五、〇〇〇	100%
一九二五—一九二六	一、四七、六九、〇〇〇	108%
一九二六—一九二七	一、四七、一四、〇〇〇	107%
一九二七—一九二八	一、四七、五七、〇〇〇	107%
一九二八—一九二九	一、五〇、〇六、〇〇〇	108%

米の收穫の増加緩慢なるは、主としてアジアの主要米産國

の耕作が、舊式に止まつてゐるからで、日本、印度支那、シヤム、フィリッピン、米國等は絶えず米作改良を努めるけれども、其他は進歩しないからである。米は主としてアジアのもので、戦前にはアジア大陸で世界の米の九七%を出し、今日も九五%を産出してゐる。其主産地はモンズン地方で特に揚子江、メーコン、イラワディ、ガンジスの沿岸に多い。いづれも水田地である。地勢上北方は陸田が多いが、陸稻は水稻よりも品質もわるく、收量も少い。

支那及英領インドは世界の米の四分三を占める、次は日本印度支那、シヤム、蘭領印度及フィリッピンである、マダガスカルも米を出して年産百萬トンに達する、米國や伊太リスペインの米作もあるが、其生産高は世界産米の1%に達しない。今世界の米の收穫高に對する地方別米産高比率を記すれば左の如し。

支 那	英領印度	日本朝鮮臺灣	印度支那	蘭領インド	シヤム	フィリッピン	其 他
四三、四	三三、二	八、五	三、九	三、四	二、一	〇、六	二、九
一九二六	一九二七	一九二八	一九二九				
四二、〇	三三、六	九、九	四、〇	三、三	二、九	一、五	三、九
四三、一	三三、〇	一〇、六	四、一	三、六	三、一	一、五	四、〇
四二、三	三三、〇	九、六	四、三	三、七	三、一	一、五	三、八

支那の米收穫は大戦前六千萬噸であつたが、内亂のため近年は減退した、英領印度は世界産額の三分一を出し、耕作地九千百萬ヘクターの中三分一即三千百七十萬ヘクターは米作地である、但し印度の米産の中四〇％はビルマから出る、この間日本の米作は注目すべきものにして、朝鮮臺灣を併合して其米作地も増加した外に收穫高は戦前よりも二〇％を増加した。今一ヘクター當りの收穫率をあげると左の如である。

	耕作地		平均收穫高	
	五年平均 (ヘクター)	一九二 九年	戦前 五年平均 噸	一九一九 二九
英領印度	三、九二〇、〇〇〇	三、六九〇、〇〇〇	一、六	一、五
日本	三、九四〇、〇〇〇	三、四八〇、〇〇〇	三、一	三、四
インド支那	三、四〇〇、〇〇〇	五、四七〇、〇〇〇	一、六	一、三
シヤム	一、八三〇、〇〇〇	二、五四〇、〇〇〇	一、七	一、八
フィリッピン	一、一四〇、〇〇〇	一、七六〇、〇〇〇	〇、七	一、三
朝鮮	一、七六〇、〇〇〇	一、五九〇、〇〇〇	一、六	一、八
臺灣	四八〇、〇〇〇	五五〇、〇〇〇	一、七	一、三
米國	二九〇、〇〇〇	四一〇、〇〇〇	一、七	二、一
伊太利	一四五、〇〇〇	一四三、〇〇〇	三、三	四、六
スペイン	三六、〇〇〇	四九、〇〇〇	五、〇	六、四

註 (ヘクターは一町二十五歩)

表中に於てスペインの一ヘクター當生産高が世界最高であることは面白い事實であつて、日本の近畿の良田に比すべき

收穫があるのである、讀者が本表によつていかに日本が其主
要食糧品としての米の收穫に盡力してきたかを知ると今時に
地力減退などいふことは人爲的に防ぎうるものであることを
知られるであらうと信じる。

○シヤムに於ける邦人の事業

日本からシヤムへの

直輸入は最近の統計によれば年額千三、四百萬圓である、總
輸入の六分五厘に過ぎないが、此外に香港及シンガポールを
經由して輸入するものが、殆ど同數量に達するであらう、
輸入品の最重なるものは綿糸布、海産物、亜鉛板、陶磁器、
燐寸、印刷用紙、セメント、琺瑯鐵器等で、日本への直輸出も
最近の統計では千三四百萬餘圓に達し米を第一とし、チーク
及唐木が之につぐ、猶此外に香港向けに輸出する米が日本
に向ふ量も多い。しかし之によつて暹羅側からみても、日本
からみても、その輸出入が貿易の主要部を占めてゐるとはい
へぬ、けれども近年日本の暹羅に對する輸出が頗る目醒まし
く進展しつゝあるのは事實である、日露戦直後日本の對シヤ
ム輸出は僅々二十三萬圓であり大戦前に百萬圓位であつたの
に比べると二十一年の間に四十七、八倍したことになる。
勿論英領印度三億五千萬人、蘭領印度五千萬人の人口を有する
市場に比べて、シヤムは市場としては小さいけれども、日本
商品のかゝる進展をみると今後尙一層開拓するの餘地は十分
にある、殊に日本品の直接供給者は支那の華僑である、今後
日本商人が此方面に手を出して、直接土人と取引をすれば、

其進展は更に倍加するであらう。

今之を蘭領印度に見るに、この方面では日本の商人が領内に到る所に根據を据へ皆相當に成功してゐる、昨年五月以來の華僑排日ボイコットの際に於ても打撃を被ること最少かりしものが蘭領であつて、事實蘭領では、いかに華僑の力を以てしても最早全然邦貨を排斥するやうなことは不可能である。

就中蘭領東印度地方殊にジャバに於ける日本人の現在の位置は、大體日露戰爭以後の發展に係るものやうであるが、現在爪哇スマトラの内地到る所に定着して相當に地方的商取引に實力を獲てゐる日本人は、多くは當初行商人として全國を巡歴せるがため、比較的短時日の間に國內の諸事情に通曉することを得、且つ土語にも比較的容易に習熟することが出来たのであつて、それが今日の原因となつた、且蘭領では人口が大都會に偏在することが少く、多數の地方的商業中心都會があつて、内地の交通の線が大に開けてゐるから、自己の力に相應した程度の店舗を其地方的事情に通曉した地を開きて定着するのに都合がよかつた、加ふるに日本は從來ジャバ糖の一大顧客であつて、有力な邦人貿易商が多くの支店を有しこれらの人々が相共に日本商品の賣込に努力し、正金、臺銀、三井、華南の四つの日本人銀行があつて、パダグイヤ、スラバヤ、スマラン等の貿易港にある有力な本邦會社、銀行の背景となり、後援となり、内地に入り込む邦人小商人の活動を支持したのであつた、従つて現在では内地到る所の小都會に日本人が居て單に日本雜貨の販賣を營むのみでなく、中に

は専ら歐米雜貨を取扱へるものがあり、従前華僑の獨占する

所であつた土人產物買出し、仲買等の仕事にも日本人の活動が目醒ましくなつてきた、然るに翻つて在暹邦人の現狀を見るに、現在在留の日本人は僅に女子供を加へて二百七十二人この中商業に従事するものは、三井物産の外に相當の邦商四戸に過ぎない、何れも大したものではない、寛永頃の山田長政當時の日本人街の勢力のごとき到底比べものにならない、これは治外法權の關係から日本人が蘭領に於ける如く内地に入り込めなかつたことや、支那人が早くから各方面に其根據を固めて邦人の割込を困難ならしめたこと等の原因もあるが、しかし日暹通商條約を結んで三十年、シヤム人自身は商業を輕視して手をつけぬ、外人の來りて之を營むに任かせて居ると云ふ事情などから見て、邦人の從來シヤムに入込むことの甚だ少かつたことを残念と思ふ、勿論シヤム内地の交通不便とか其氣候風土に對する誤解があつたのも有力な障害であつた、しかし交通衛生の施設が近年急激に改善せられてゐるのとがまだ邦人間に十分にされてゐないこと及シヤムの貿易が事實上支那人の手に限られて居る現在では何とかしてこゝにこの困難を打開するの途を講じたい、邦人の大にこの方面に進出するやうに奨励策を取るべきではないかと考へる、今邦人の着手しやすい事業をみると。

第一に林産である、チークの方は歐洲人が大規模の特許を得てゐるから差しあたり手がつけられぬけれども、紫檀、黑檀、花櫚、黃楊等の唐木類は見込がある、邦商で本邦輸出を

營むものがあるから、これからさきは邦人の山地入込みが必要であり、利益も多いであらう。

第二に米作企業である、現に本年一月一邦人が約百五六十町歩の既成米田を購入し米國式機械で經營を始めたものがある、成績未だ不明であるが、シヤムの米作は有望である、右の土地はバンコックより一時間で汽車の便のあるランゲシットであつて、土地購入價格一反六畝が十六鎊であつた、即我一反の地價は邦貨十圓にも足らないのである、但し從來はその收穫した米を皆支那人の仲買の手に處分したのであるが日本人がやるとすれば、自分で處分する必要があると思ふ、即精米所を自營するのがよい。

第三に甘蔗の耕作によつてジャバ糖の輸入を防ぎうる見込がある、昔はジャバよりもよかつた土地である、土人の勞力が安價であるから腕次第では憶かに資本投下の價值があるであらう。

第四にゴムの栽培の見込がある、現に其栽培面積は大に増加し米、錫、チークにつき、三大重要輸出品となつた、チーク材と伯仲するの地位をしめてゐる、地價の低廉な國である、邦人の企業を歡迎するであらう。

第五に馬來半島に於ける錫の採取や鐵礦の探掘も有望である、棉花栽培も有望である、予は邦人の大に暹羅を研究せんことをすゝめたい。

○北樺太の事情

北緯五十度の線を以て日本と境する北樺太に入ると人口の稀薄に驚かされる、南の方は人口二十三

萬と稱するに比し北は僅に一萬五千に過ぎない、従て數日無人の境を過ぐることも決して珍らしくはない。

サハリン五年計畫の實行機關として昨年十一月から「アソ」の活躍がある、これは森林伐採をやつてゐる半官の事業で、デルビンスコエ村を中心として東はカタングリ、西はホエ南はナイナイ及ビリウオの森林地へ、年齢四十五歳に達せざる農家の壯丁を總動員して送込んでゐるのであるが、餘りに唐突に着手したので其成績を擧ぐる事が出来ず、食料や馬糧の輸送が間に合はなかつたため、動員せる労働者を收容すべき家屋なく、支給すべき被服なく、伐採の器具器械も完備せず、目下賃銀値上の要求と糧食改善とが労働者の不平となつてゐるらしい。アソ伐採事業もさることながら勞農制度國の農民程悲惨なものはない。漁村キルビーチナヤの如きは土人ツングースの外は黑龍江州地方からの移住であり、新興の石油、石炭企業に従ふものも大部分大陸から渡來し、政府も亦移民を奨励してゐるが、土着の住民の中には革命政府の新政府に耐へずして大陸に向つて退去するものがある、かくて最近北樺太の住民には新陳代謝が行はれた、ところが新らしくソヴィエットの新政策としてのコルホーズ(集團經營)が實施せらるゝといふことをきいて一層動搖をしてゐるから、失望落膽の聲が多く人民全く流動狀態にあるといふことである。

但し石油産地オハは近頃追々と發展した、昭和三年春には油井櫛二十六本内十八本稼業中であつたが、昨年は採油坑井四十一の中休止は五坑で北樺太石油會社の企業は工程も進歩

○ロシアの國營農場

質疑應答

以上は現在のロシヤの農業の米國化の傾向を語るものであるが、果して都合よく行けば、ロシヤは再び世界の穀倉となりうるのである。土地廣くして人の少い國であるから、さうしたことも考へられ實行されるのであるが、問題はさうしたギガントの農夫の能力如何である、人は働かないでも全く機械力によるとすれば、つぎは機械と人力との争闘が起ることとなる、しかも別項述ぶる通りノヴォシビルスクには食糧の不足がある。矛盾の多い國であるとせねばならぬ。

質疑應答

質疑應答

問 ノヴオシビルスク市

三三三